

学芸員エッセイ

# 潤一郎あれこれ

## 雪子と重子と「平安神宮の花見」 —「細雪」と戦争の時代—

優美極まりないが何につけ優柔で、返事はといえば、いつも「ふん」の生返事。自分の気持ちを、はっきり表わそうとしない。それでいて、したたかに思いを通してしまふ…。谷崎潤一郎の代表作「細雪」のヒロイン雪子は、そんな女性である。

芦屋に暮らす中産市民家族の、1936(昭和11)年の秋に始まる、穏やかで豊かで美しい日常を描いた傑作「細雪」。その主人公時岡家の人々は谷崎一家そのもので、雪子のモデルは谷崎の妻松子の妹重子になる。作品での出来事も、当時の谷崎家の事実ほぼそのまま。雪子にはいくつもの縁談が持ち上がるが、重子も見合いを繰り返した。見合い相手からの電話に、もじもじしてなかなか受話器を取ろうとしなかったというエピソードはいかにもだが、これも実際にあったことだったのだろう。その一方で、結局は思い通りに家柄の良い相手に縁づいてゆくのも雪子と同じ。作中の雪子は、藤原氏の流れをくむ公家の家筋に嫁ぐが、重子は松平家の血を引く男性と結ばれる。

重子の羽織は、平安神宮での花見の折に着られたもの。戦後の一着で、彼女らしい、奥ゆかしくも芯の通った優美さを映し出している。

平安神宮での花見は、谷崎一家、そして「細雪」の時岡一家が心待ちにしていた、毎年の春の催しであった。年々の写真は、満開の桜と着飾った女たちとが咲き競って美しく、この花見が彼らにとってまさに特別な毎年の行事であったことを物語っている。一家の人々は、その花の巡るたび、今年こそはと雪子そして重子の良縁とその行く末の幸を願いつつ、ともに過ぎゆく春へのなごり惜しさ寂しさに誘われもするのであった。

一方、1936年秋に幕を開ける小説の世界は、戦争の時代でもあった。1937年夏に火ぶたが切られる中国との戦争は、花見の春を追うごとに泥沼化し、巷には「挙国一致」の標語があふれるようになる。「勝ってくるぞと勇ましく〜」(「露堂の歌」1937年)と軍歌の威勢の増すにつれて、パーマネントは肩身が狭く(「パーマネント追放運動」1939年)、街のネオンも消えていく。「一汁一菜」が流行語となり、駅弁に焼き芋が登場した(1939年)。



重子の羽織

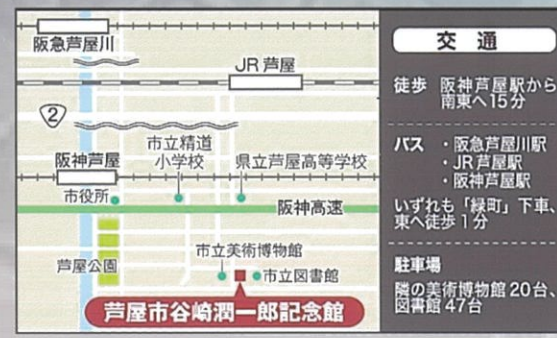
破局への暗く速い流れは、すでに日本を呑み込んでいた。1941年春、その年の花見もすませ、雪子そして重子が嫁いでゆくところで、「細雪」の物語と現実とは、ともに幕を降ろす。そしてその冬には、ついに太平洋戦争の戦端が開かれるのだ。

名場面中の名場面として、「細雪」の作品世界を象徴する「平安神宮の花見」。雪子や重子の面影とも重なるその優美は、重苦しい陰画に縁どられていたのである。

芦屋市谷崎潤一郎記念館 井上 勝博



平安神宮の花見 1940年  
左端が重子  
(AIによる自動彩色を人間の調整で仕上げた彩色写真)



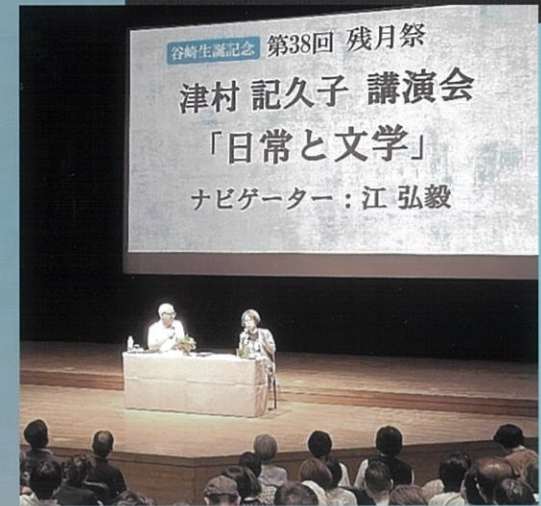
谷崎記念館だより 2024  
2025年3月1日発行  
発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館  
〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-15  
Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244  
HP: <https://www.tanizakikan.com/>

vol.6 2024

# 谷崎記念館だより

第38回 残月祭

津村 記久子 講演会



第38回 残月祭  
津村記久子講演会「日常と文学」

文豪・谷崎潤一郎を偲び、誕生日を祝う「残月祭」。7月24日の誕生日に近い、21日(日)に芦屋ルナ・ホールにて行った。

今回は、作家の津村記久子さんにお越し頂き、「日常と文学」というタイトルでご講演頂いた。津村さんとの共著がある、編集者・著述家の江弘毅さんにナビゲーターをお願いし、対談形式でお話を進めて頂いた。三度目の妻松子夫人とその妹たちとの日常を描いた谷崎の代表作「細雪」を取り上げられた。未婚の妹二人の見合いや恋愛を中心に、三女雪子がお見合いを

繰り返す中で終始受け身の様子や、お見合いの場所にこだわりを見せ、実在する店名を挙げていく描写など、女性の生活に起きることを細やかに描いている点に、「細雪」の特徴や良さが表れていると述べられた。また、2023年の谷崎潤一郎賞受賞作『水車小屋のネネ』について、その創作秘話や作品のモデルとなった場所などをお話された。お二人のテンポの良い掛け合いに会場は盛り上がり、来場者は熱心に耳を傾けて文学の世界を味わった。

芦屋市谷崎潤一郎記念館